



O-8 地域在住高齢者における社会的孤立の有無と意味のある作業への参加状況との関連について

○仲田 奈生¹⁾, 山本 真理子¹⁾, 青木 竜太郎¹⁾, 金弦 敬子¹⁾, 津田 宏太郎¹⁾

1) 島根リハビリテーション学院 作業療法学科

Keywords: 地域在住高齢者, 意味のある作業, 活動と参加, 社会的孤立

【はじめに】

近年, 社会的孤立によるソーシャルサポート・ネットワークの不足は, 抑うつ, 自殺リスク, 早期死亡, 身体健康状態の悪化, 主観的幸福感の低下など様々な要因を引き起こすことが報告されている. その他要因も考えられる中で, 我々作業療法士が焦点を当てる作業遂行と社会的孤立との関連を報告したものは見受けられない.

本研究の目的は, 高齢者の社会的孤立を簡便にスクリーニングする尺度として使用されている LSNS-6 の日本語版を使用し, 地域在住高齢者の社会的孤立の有無と意味のある作業への参加状況との関連を明らかにすることである.

【対象と方法】

島根県奥出雲町在住の 65 歳以上の高齢者を対象にアンケート調査を実施し, 有効回答が得られた 310 名を分析対象とした. 書面にて研究の趣旨について説明を行い, 調査参加の同意を得た. 研究実施にあたり, 島根リハビリテーション学院倫理審査委員会の承認を得ている.

対象者に年齢, 性別, 家族および友人関係におけるソーシャルサポートの状況, 個人にとって価値のある活動への参加状況の評価項目が記載されたアンケートを配布した. 家族および友人関係におけるソーシャルサポートの状況の評価には, 日本語版 LSNS-6 を使用した. 家族および友人関係のネットワークに関する合計 6 項目について, それぞれ 6 件法でネットワークの人数を回答するものである. 得点範囲は 0 点~30 点で, 得点が高い方がソーシャルネットワークは大きく, 12 点未満は社会的孤立を意味するものとされている. 個人にとって価値のある活動への参加状況の評価には, 自記式作業遂行指標 (SOPI) を使用した. 9 項目の質問に対して「ほとんど満足にできていない」から「とても満足にできている」を 1~5 点の 5 段階で評価する. また, 下位因子は「余暇活動」「生産的活動」「セルフ・ケア」からなり, それぞれの因子ごとの得点範囲は 3~15 点である.

統計学的処理には SPSS (Ver.26) を使用した. 日本語版 LSNS-6 の得点の 12 点以上を非社会的孤立群, 12 点未満を社会的孤立群とし 2 群に分けた. 2 群間の比較には, 性別は χ^2 検定, 正規分布する項目は対応のない t 検定, 正規分布しない項目は Mann-Whitney の U 検定を用いた. その後, 社会的孤立の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を用い比較・検討を行った. それぞれの優位水準は 5% 未満とした.

【結果】

社会的孤立群の平均年齢は 74.8 ± 6.6 歳 (男性 33 名, 女性 33 名), 非社会的孤立群は 74.4 ± 6.0 歳 (男性 108 名, 女性 136 名) であり, 両群間に統計学的有意差は認められなかった. SOPI においては, 総合点および下位因子全ての項目において, 両群間に統計学的有意差を認めた ($p < 0.01$). 有意差のみられた SOPI の全ての項目を独立変数, 非社会的孤立群・社会的孤立群を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果, 独立した優位な変数として選択されたのは下位因子の「余暇活動」であった ($p < 0.01$).

【考察】

高齢者のソーシャルサポート・ネットワークの不足は, SOPI の下位因子である「余暇活動」への参加を阻害している可能性があることが本研究の結果より示唆された. 余暇活動の充実, 高齢者の主観的幸福感に影響を与える (橋本 2015) ほか, 認知機能とも関連することが報告されている (小園 2016). 作業療法士として, 余暇活動の実現に向け, 心身機能や環境面に対して直接的なアプローチが必要になる一方で, 対象となる高齢者が得られているソーシャルサポート・ネットワークの評価も行い, アプローチの視点に加える必要性があると考えられる.